

日本文化と禅

在りし日の句友たち（一）

……………淵上 磊山

『茶事訣』に触れて

……………片野 慈啓

西行、道元、良寛の短歌（三）

良寛の短歌 ……………斎藤 是心

人間禅の書（五） 長屋哲翁の書

……………藤井 紹滴

俳句と些子記抄 第9号より

……………齋藤 徳治



在りし日の句友たち（一）

淵上 磊山

熊本支部が創立されましたのは昭和24年、第1回^{せっしんえ}撰心会以来^{こうらんあん}耕雲庵立田英山^{ごけんついで}老大師の御鉗鎚をいただいてまいりました。その後老大師のおすすりめもあり、俳句への関心も高まりまして、昭和42年に俳句部を創設、「黙って10年」を合言葉に俳句の細道を歩むことになりました。

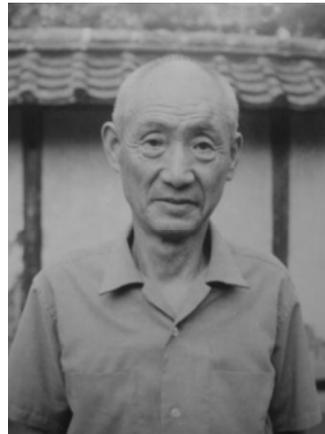
当初は部員13名、毎月1回の俳句会を続けて今に至っております。何しろ皆ずぶの素人、どんぐりの背比べ、無我夢中でありましたが、『合掌俳壇』選者の齋藤兼輔^{さいとうかねすけ}先生のご指導をいただくことになり、俳誌『曲水』への投句を繰り返しながら、以来40年歩みを続けてまいりました。

顧^{かえり}みれば、40年の月日の経過の間に、9名の句友の方々が^{きせき}鬼籍に入られました。この方々はそれぞれ生活あるいは思いを俳句に^{この}詠み遣されていますが、肉体とともに、その俳句も永遠に消え去るであろうことを惜しみ、ここに数少ない句数ではありますが、目に触れる形で残すべく、作品の一部を採録して、亡き句友たちへ^{ささ}捧げたく存じます。

^{ささこうげつ}
笹江月居士

昭和47年5月5日帰寂(享年84歳)(注1)

明治生まれで、支部設立当初からの参



笹 江月居士

加でした。大正14年、耕雲庵老大師の師である両忘庵釈宗活老師に参禅、江月の道号を持っておられました。

初期の摂心会は、その都度布団一式を各人持ち込んでおりましたので、運送事情の悪い時代でお手伝いしたことなど思い出します。お体は至って健康、健啖そのもので頑張っておられました。県内各地を歩き、地質調査などに情熱を燃やされる日々でありました。

鷹とびの影幾度か踏む春日和 江月 昭43

満月の湖面となりぬ水前寺
立春に布団乾す娘の素足なり 昭44

花柘榴空を彩り梅雨きざす
粕汁かすの熱きに芹せりの香りけり 昭44

時には若い娘の華はなやぎに目をとどめ、独特の有効な食生活の工夫の話も聞かされました。

鶯うぐいすに先越されけり沢下る 昭45

肥薩越え雪一面に音もなし 昭46

早立ちの駅まで涼し一人の道

九州の脊せきりょう梁山脈を越えての旅も幾度かあったことと思います。大自然の中に過ごされる豊かな日々に、次第に句境を高めてゆかれたことでありましょう。

秋川原あきがわ仏陀の顔の石拾ふ 昭47

桐きり一葉落ちる茗荷みょうがの花の上

月さ冴えて総身で聴く雁かりの声

行く年の火を封じたり火消壺つぼ

中川千巖居士せんがん

昭和56年5月28日帰寂（享年61歳）

太平洋戦争前から修行しておられ、終戦をサイゴン市周辺で迎え、俘虜生活の後帰国。当時戦禍を避けて清里に疎開しておられました耕

うんあん

雲庵老大師の下での自活修行にも参加された、支部創設以来の大先輩であります。熊本市に程近い農業地帯で、獣医を営みながら、素朴な村人と恵まれた自然環境の中での生活でありました。

ざるざる 箆ざるごとごとに柿やまが出でされされたる山家やまがかな 千巖 昭45

しゅんぎょうしゅんぎょう な や あかうし さ
春はる 暁あけぼの や納屋のりやにに褐牛あかひし覚さめててををり

たづなたづな
長手ながて綱牛あづなににまかませるる花野はなかな 昭46

ささ うりうり
星ほし冴さえててまだまだ声高こゑたかにに瓜番屋うり 昭47

うわさうわさ
ちらほらちらほらとと鶴つるのの噂うわさ や秋深あきふかむ 昭48

はしげた つ
橋はし桁げたにに吊つるるされててありあり種たね俵はたけ

あめあし
行春あきののうつろうつろ雨脚あめあし見みつめつめけり 昭49

牛うしにに飼葉かひ与よへへててよよりのの年賀としがたかな 昭50

やすやす
病やまむむ牛うしにに頼たのまれててををりり明あけけ易やすく

なんどなんど さくろさくろ
人ひと気きなきなき納戸のりどのの裏うらやや柘榴さくろ散ちる

ああ ぬぬ しゅんとう か
今いま生なれれしし子牛こ濡ぬれれををりり春燈下しゅんとうか

かい
見みるる人ひとももなきなき峽かいのの田たのの野菊のぎくかな 昭51

梅うめ咲さくくやや残のこりのの寒ふゆをを耐たへへてて白しろ

かえでかえで におにお
花はな楓かえで透とけてて朝日あさひのの匂におひひけり

こぶねこぶね
冬耕ふゆのの牛うし乗のせてて行いくく小舟こぶねかな 昭53

たいとうたいとう に れ か
菜さいの花はなやや牛うし駢たいとう蕩たいとうとと反芻にれかをを噛かむ

牛に頼られる明け暮れがそくそくと伝わります。支部行事をはじめ、いろいろの相談に乗っていただきましたが、お酒も大好き、急がず騒がず、いつもにじみ出る優しさで接していただきました。

あおばすくあおばすく
青葉木菟友東京あおばすくにに病やまむむと言いふ 昭50

えだかわずほしざおえだかわずほしざお
枝えだ蛙かわず干竿ほしざおそそとと取とりりここめめる 昭51

悔くのの無なきき往い生せいなりりしし春はるのの月つき 昭52

えしゃくえしゃく もみじもみじ
牛追うしおひとひととと交ますす会かい釈えしゃく や草紅葉もみじ 昭53



中川千巖居士

かくだる はかま ぎ こ ち
角樽を下ぐる袴着東風吹ける

そうめいあん けいがん
滄溟庵浜田圭巖老居士

昭和58年12月4日帰寂（享年60歳）



滄溟庵浜田圭巖老居士

熊本支部創立の原動力として、耕雲庵
老大師をお迎えして、熊本の地に禅を打
ち立てられた大先輩であります。戦前に
入門され、戦後清里での修行も千巖居士
と共につぶさに経験されました。そして
帰郷後の圭巖青年は、この地に坐禅修行
の場をという夢を遂に成し遂げられたの
です。すべて「段取り・真剣・尻拭い」、
そして「黙って10年」でした。今では耳
慣れた言葉ですが、初めて聞いた時は極
めて新鮮、「これが禅！」という思いでし
た。大変工夫に長けた方でもありまして、

わが支部内に早い時期に、俳句・茶道・書道・弓道の各部を作る発案
も老居士でありました。

橋に来て風に遊ぶや立待月	圭巖	昭43
冬空に敲く板木や嵯峨の寺		
若楓青き雫を箒目に		昭44
嵯峨御所の高き廊下や苔の花		
老いの背を曲げて憩へり浅蜷売り		昭45
隠れ耶蘇の島や冬波荒れ止まず		昭47

五月の本部道場での記念式に出席の帰り、皆で京都駅に下車しては
一日遊んだものです。中でも、齋藤兼輔先生お守りの義仲寺訪問は忘
れ得ぬものとなりました。

走り根の五月雨分かつ鞍馬かな



齋藤兼輔先生(前列右)と(昭和47年、義仲寺にて)

吹き上ぐる青嵐あおあらし受け京の寺

一尺の朝顔咲かせ肥後の人 昭48

萩はぎ分けて庵あんに一用ありにけり

薄明にあに桃割はつもうでれ匂におふ初詣 昭50

小鳥こ皆花めに濡れみし吉野山

群むれツグミはやとも早鞆そうしんの瀬の早晨せを (注2) 昭50

禅林はすべてくぬぎの落葉かな

雪わびすけ乗せて侘助の紅のぞきたる

道場内は一木一草に至るまで熟知して、あそこには何を、ここにはこれを植えてと、愛情込めて手配をされていました。また「道場で最も好きな景は、冬期すべての葉が落ちてしまって真裸の木ばかりになった景だ。」と仰しゃっていました。

初栗はつくりの一つ添へあり患者食 昭51

島日記ツグミ日びより和しると誌しあり

一の浜二の浜追へる時雨しぐれかな

手をついて光藻ひかりものぞく旅五月

眉まゆ一つ師は動かさず書に向ふ

若水の新しき音汲みにけり 昭52

詠草には各地の旅の句が目につきます。老大師のご巡錫じゆんしゃくを追って各地の撰心会に参加し、御父君のご逝去を逸された、在りし日のあの情熱の面影をふと思ひ浮かべます。

一行庵中村義堂老師

平成13年11月4日帰寂(享年78歳)



一行庵中村義堂老師

熊本支部第1回撰心会にて耕雲庵老大師りょうひつに入門、遂に大事了畢され、熊本支部担当師家として御鉛錘げんづいいただきました。老師はまた、俳句におきましても、句集『冬麗』とうれいに見ることが出来ますように、多くの珠玉の句を詠んでおられます。ただし、このことにつきましては、『禅』31号に詳しく述べさせていただいておりますので、ここではご報告のみに止とどめます。

(つづく)

編集部注

(注1) 帰寂じやくじょう:(寂静の本元に帰る意から)人が死ぬこと。特に、僧侶が死ぬこと。

享年:死んだ時の年齢。

(注2) 早鞆:早鞆ノ瀬戸。関門海峡東端の最狭部の水道。早い潮の流れで知られる。関門橋がかかる。

早晨:早朝。

著者プロフィール



ふちがみらいざん
淵上磊山(本名ノ彌一)

大正13年生まれ。昭和24年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅布教師。軒号ノ雙泯軒。

『茶事訣』に触れて

片野 慈啓

縁あって19歳で^{うらく}有楽流茶道に触れて40年の歳月が流れました。

先日我が家の押入の引き出しから、当時^{けいこ}稽古の後^{つづ}綴っていた稽古日記のノートが何冊も出てきてびっくりし、それを一冊ずつ読みすすむうち、当時の稽古の様子や^{せんがいあんりよくすい}洗涯庵緑水（三浦緑水）先生の言われたことが生き生きと伝わってき、自分の足跡を確かめることができるというチャンスに恵まれました。また同時に、今後の自分の在り方……特に有楽流茶道を切り口として見た時の在り方が浮き彫りになって見えてきました。

それは、^{せんしんあんぼうすい}耕雲庵立田英山^{しゆ}老大師の奥様であられた^{げつ}洗心庵楓水（立田珠月）様、その次女の^{せんげん}洗涯庵緑水先生のお二人が、忍耐強く指導され大切に育ててこられた人間禅道場の有楽流茶道は、「禅茶」と呼ぶにふさわしい内容のものであり、自分はその恩恵にずっと浴させていただいてきた幸せ者だったということでもあります。

1 『茶事訣』との出会い

近年道場でも禅を広める方法として茶道にスポットライトがあたり、茶道を盛んにするよう行事も計画・実行されてきておりますが、私も促されるように「禅茶」について学ぶようになっていきました。

中でも若い時から親しんでいた『^{なんぼうろく}南方録』や^{じゃくあんそうたく}寂庵宗澤の『禅茶録』や^{にょよあん は がとうねん}如々庵芳賀洞然老師の『^{いちみ}茶禅一味』、奥田正造先生の『茶味』などの著書を今一度読み直す時間が増えました。そしてこれに、岡山の

蓮華庵石田 妙 耕老禅子からご紹介いただいた『茶事訣』が加わり、私の新しい茶の指導書になりました。老禅子にご紹介いただくまで全くこの文の存在は知りませんでしたので、本当に良いタイミングでご紹介いただいたと深く感謝しております。

老禅子をご自身で手書きされた『茶事訣』の文とともに、その文に触れることになったいきさつを書かれた手紙が添えられ、私の家に届いたのは2008年（平成20年）5月20日のことでした。しかし、文は漢字が多く難解な言葉が連なり、所々は読めましたが、半分は意味不明という危なっかしさ、やはりやさしい解説本が欲しいと思いました。この文を解説した本が柴山全慶老師（元南禅寺派管長）著『禅茶の心』（春秋社）で、たまたま道友にこの本を探していると話したところ、その方の手配により数日後に小包で手元に送られてくる、というまたまた素早い運びとなり、私は徐々に深く読んでいくようになりました。

茶道に縁のある方々と共に読むために、『茶事訣』をコピーして何十冊もテキストを作りました。以来、中央支部（現京葉支部）茶道部と澤木道場みどり会の稽古の折、初めに少しずつ読むようにしました。

2 履霜軒斯経慧梁禅師について

著者の履霜軒斯経慧梁禅師について調べましたところ、撰心会で唱える『坐禅和讃』の作者の白隠禅師の下で修行した方だと知り、益々親しみを感じるようになりました。

この『茶事訣』は、著者の斯経禅師が歴史上実在した人物であり、生・没年も修行先も分かっていることが、他の『南方録』や『禅茶録』と微妙に違うところであります。

江戸時代中期の1722年に姫路の地でお生まれになり、1787年に京都で亡くなっておられます。白隠禅師が沼津近くの原におられた頃、23、4歳で弟子入りし、37歳で京都に戻るまでその門下として修行されましたが、白隠の四哲に数えられる程の方でした。

そういう方の書かれた茶論ですから内容はなかなか厳しく辛辣で、当時の茶道・茶会への批判は「齒きぬに衣を着せぬ」鋭い言い方です。しかし、京阪神の多くの人々の帰依を受け、亡くなられた後に光格天皇から扶宗大綱ふそうたいこう禅師という禅師号を賜っている、という立派なお茶人です。

3 『茶事訣』より

今回は紙面の都合もありますので、その中の幾つかの件くだりを抜き書きして紹介させていただくことにいたします。

本朝ほんちょう茶の湯の式は……其清賞そのせいしょう（風雅な遊び）奇韻きん（すぐれたしらべ）実に唐の陸羽に譲らず、皆禅林の古意したを慕ひ、質素たつとを尚たつとび枯淡あまなを甘あまなひ（好み）、左右みなもと源あに逢あへり（真実の自己を徹見し、その悟りが身に付けば、日常の言行ぶつさぶつぎょうが仏作ぶつ仏行ぶつぎょうとなる）。

和ひんじゆとは賓主ひんじゆ（客と主人）和楽、順従したがう（したがう）の義いぎ（意味）なり。

唯寂ただの場は禅林より相伝くけつ（代々うけつぐこと）せる口訣くけつ（口伝）故伝ゆえはらず亦またよく能よくし難たがき緊要ところの処ところなり。

此この場は室内にて参取すべき密伝むねの旨むねなれども、今略してその大意を説破せば、心をして正しょうねん念しょうねん（正しいおもい。真実の自己）に安住すること虚空こくうの如ごとく無所依むしょえ（よりどころのないこと）ならしむることなり。

- ・無所依むしょえならしむるとは何しさいの子細しさいもなく、一点の思想も構かまへず、些いささかの道理を挟かままず、無心無造作に茶事を講ずるなり。これ即ち我が真を完うするの場なり。

- ・利久居士（千利休居士）の歌に＜茶の湯とはただ湯を沸し茶をたてて 飲むばかりなる本を知るべし＞とは此の訣（奥義）なり。

禅林にて入定の時に止静（坐禅の始まり）を知らしむるに鳴らし物を三つ打つ故、其の義を表して茶碗にて茶筴を洗う時、碗の縁にて三度音をなすなり、……

- ・此れ賓主共に妄心（迷いの心）を離れて、寂静の茶三昧（茶事の時には、ひたすら茶事に打ちこんで他のいかなる念慮もないこと。）に入らしむる表幟（しるし）なり。

- ・能く此の意味に通ずれば、本心（真実の自己）に住ずることを得て一切の勞擾（煩わしさ）を免れ、作法の手前も自然と穏当（おだやかで道理にあてはまっていること）見事に出来（成就）すべし。

塵中（世間）の境界にて暫時ながらも任運無作（自然のままに無念無心に行為すること）の用（活動）をなして冷淡の一味現前すれば（味もそっけもないように見えるが、食べてみると無量の滋味と無上の醍醐味（乳を精製して得られる最も美味なるもの）がある）、万劫（きわめて長い年月）の飢えを消すべき希有の（珍しい）楽しみなり。世間最上の風流と云つべし。

故に茶道にては此の楽しみに凝って（熱中して）純一なるを貴ぶ、常釜と称するは此の心なり。

- ・熟々当世茶道の交わりを見るに……主家は唯道具の奇を飾り、事さらに誇るの雑念許りなり、……

凡そ一切の事は理を得て高尚の地に致るべし。此の理を会得して、本より割り出して末々の茶事を修治せば、一々の規矩（規則）格別に拘らざれども、道に合はずという事なし。

- ・若し和敬静寂の四徳手に入り了れば、法爾に（自ずから）簡易古雅（古風で優雅）の趣を得て、其の人柄も大いに勝るべし。……直に大道（仏道）の奥義に合ふなり。

又大徳春屋国師 利久の肖像に讃（絵にちなんで書かれた詩）して云く、「趙州の且坐喫茶（まあ坐ってお茶をおあがり）底（の応対）若し斯翁（この翁）にあらざれば知ることを得じ。」と。此等の茶理に通ぜざれば無根本の茶の湯なり、其の本乱れて而して（そうして）未治る者は否ず。

余前年来、茶事（茶道に関すること。茶会）を信ぜず、茶人の様子を見て甚だ笑ふべき事に思へり。

- ・後來風と通ずる処あり（大道の奥義に達する茶理に気づいた）、爾来 茶道主張の心を生じ、因て茶名ある人々へ…… 遍く探り討ぬるに、能く茶理に達して寂の場を会する底（者）一箇もなし。

茶祖達の風規（日常生活のきまり）を窺ふに、皆茶味禅味一致なることを体得し、大徳の和尚方に参訣（奥義を究めるために師に参じて修行すること）して造詣（技芸に深く達していること）の分（様子）あり、各上達の人なり。

- ・今時、茶を習ふ人を見るに、事々の作法に密なることは、古へよ

りも却^{かえ}って勝れたるほどなれども、茶理にはいよいよ遠ざかりて達すること能^{あた}はず、妄想（迷い）の茶の湯と云つべし。此れ全く指南の道断^たえたる故なり。

点前の端々の細かい事はさておき、禅によって寂の境涯（見性了々底の境涯）を体得し、そこから現れる茶理に通じ、純一な心も養って、常釜と称する人格も磨き、心が正念に住しているという我が真を完うする場を室内にて確かめ、大道の奥義に合う茶道を目指しなさい。

そうでないと……道具の奇を飾り、誇るばかりの無根本の茶の湯になって、一々の作法は細かいが、理想の茶理には遠く、妄想の茶の湯となって笑ってやりたい程の内容のものになってしまう。実際名高い茶人といえども、一人として寂を体現している人は、探したけれどもいなかった。

これは、禅をもととした茶の湯の指導の道が断えてしまったからだ。だから私はこうして世の人々に知らせたくて、この『茶事訣』を書いているのだ。

このように斯経禅師は、書いていらっしゃるのです。

4 本物の禅茶を広める

素晴らしい見識の文に出会い、私も勇気をもらい、長年触れてきた道場の茶道が本物であったことを喜び、自信を持つとともに、ご指導いただきました洗心庵楓水様、洗涯庵緑水先生に感謝し、改めてその本物を正しく広め伝えていかねば、と衿^{えり}を正す思いをいたしました。

またその努力の傍ら、本物として伝わらなければそれはそれまでと思い定める気持ちも必要と、どこかで見切りをつけ、日々の自分のペースを乱さぬよう、自分が納得のいくところでしか行動しなくていいと我が身に言い聞かせ、その分身近な人達と一日一日を楽しく過ごし

ていこう、と思い始めました。

それは、私自身に残された時間の先が見え始めた、ということでありましょう。

いかに人が多く集まっても、その内容や如何^{いかん}？と疑問を持つような茶であれば、古来それを批判した文も多々あったことを知っている身としては、良心の咎^{とが}めるようなことはするまいと心に誓います。

迎えるお客様を仏様と心得て一対一を基本とした時間、それは必ずしも茶室の中だけのことではないはずで。柴山全慶老師が解釈しておられるように、禅茶は茶席の中であろうとなかろうと、いつでもどこでも、本心を離れない茶人としての態度でなければならない。生活の全体が茶であるということにならねばならないのだと思います。

このことは、「珠月様の生活は、その生活全体がお茶でした。」ということを有楽流の先輩からお聞きしましたが、その言葉とびたりと一致します。珠月様から直接有楽流を習われた方にして初めて言える言葉であり、真実なのでしょう。坐禅もし、同時に茶道もする、その生活全体がお茶だったということは、何と素晴らしい禅茶を实践されたことかと嬉^{うれ}しい気持ちになりました。

我々はその足元にも及ばないと思いますが、俗に流れていくのを少しでもくい止める力にはなりたいと願いつつ、禅茶を広める努力をしてまいりたいと存じます。

編集部注

本稿は、斯^{しきょう} 經^{えいりょう} 慧^{りょう} 梁^{りょう} 禅師著『茶事訣』について書かれたものでありますが、正確には同禅師著『茶事訣』のうち、『略茶事訣』と呼ばれるものについて書かれたものであります。

斯經禅師が書かれた『茶事訣』には、『略茶事訣』と呼ばれるものと『茶事訣』の2種類があります。禅師は当初『略茶事訣』を書かれ、その後稿を改めて『茶事訣』を書かれたのではないかと思われま。

『略茶事訣』については、蓮華庵老禅子が『人間禅』121号で紹介しております。また『茶事訣』については、澄徹庵大重^{おおちようげい}月桂老師が『人間禅』52

号で紹介しておられます。

著者プロフィール



片野慈啓（本名／鈴枝）

昭和23年東京生まれ。千葉大学教育学部卒業。江戸川区立下小岩小学校勤務。昭和44年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。

日本文化と禅

西行、道元、良寛の短歌（三） 良寛の短歌

斎藤 是心

良寛は越後出雲崎の名主山本家の長男として生まれ、幼名を栄藏といい、16歳で元服して文孝と名乗り、名主見習役となったが、俗務のさばけるような性分でなく、18歳の時曹洞宗光照寺の玄乗破了の許に参禅、22歳の時巡錫してきた大忍国仙和尚について剃髪得度し出家した。生まれつき純真で宗教的素質に恵まれ、求道心から宗教に身を投ずる以外に生き方はないものとして仏門に入ったものと思われる。

国仙和尚は備中（岡山県）玉島の曹洞宗円通寺の主長で、ここで日夜坐禅弁道に励み、国仙の印可を得たが、国仙の示寂に会い、悟得の心境を深めるため諸国行脚の途につき、父の訃報を聞き38歳の時越後

袖裏しゆらの毬きゅう子こ直ちか千金せんご 謂いわふ言ことこそ
 好手こうしゅ等ら匹びつ無なしと 此中ここのちゆうの意旨いしゆ如ごと相問さうもん
 はば 一いち二に三さん四し五ご六ろく七しち
 ※好手こうしゅ／毬きゅうつき上手じょうず。
 等匹らびつ／等しい相手あひて。



てまり 手毬てまりの図ず（九木きゅうぼく 木ぼく 写はい、良寛りょうくわん 賛さん：新潟県つばめ 燕つばめ 市
 分水ぶんすい 良寛りょうくわん 史料館しりょうくわん 所蔵しゆざう）
 三森みつもり 九木きゅうぼく / 良寛りょうくわん と親交しんこう のあつた日本画家にっぽんがけ。

に帰住した。しかし生家に留まることをせず出雲崎を中心に転々としたが、47歳の頃からくがみやま 国上山五合庵に定住し、悠々自適の境を開いていった。

良寛の短歌は諸国行脚の頃からはじまっている。

あしびきの岩間をつたふこけ 苔水のかすかに我はすみ渡るかも

「あしびき」は岩にかかると枕詞まくらことば。「すみ」は住みの意であるが、澄むとも読めて重ね合わせの味わいをもたらしている。

五合庵には良寛が日常汲んだ苔清水があったようで、歌意は岩間の清水のように、かすかに自分は世にかくれた生の営みをつづけているという五合庵の生活への詠嘆である。五合庵の明け暮れを象徴する秀歌とされている。

飯^{いい}乞^こふと我が来^{すみれ}しかども春の野に 董^こつみつつ時を経にけり

托鉢^{たくはつ}は良寛の生活手段であった。

春の一日、托鉢に出かけては来たものの、野に咲く董^{かれん}の可憐さに魅せられ、いつしか永い時を費やしてしまったというのである。

一読つつましく自然の中に没入しきっている様子が^{しの}儂^しばれ、心癒やされる境に導かれる。

道のべに董^こつみつつ鉢の子を忘れてぞ来しあはれ鉢の子

「鉢の子」は禅僧が托鉢の折に米銭を受ける鉢である。生きるための唯一の手段である托鉢に、欠くことのできない道具である。鉄や陶のものなどあるが、良寛所持のものとして、木製で漆を掛けたものが現存しているという。

歌意は、道ばたで董をつみつみ、それに心を奪われて、大事な鉢の子を野原に忘れて来てしまったが、あの鉢の子はどうなったろうかの意。取る人はないだろうか、あわれ鉢の子よと心をやっている。

月よみの光を待ちてかへりませ山路の栗の毬^いの多きに

「月よみ」は月の古語。友人が^{ふもと}麓の村から五合庵を訪ねて来て、いざ帰ろうとする時に詠んだ歌で、どうか月の出を待ってお帰り下さい。山路にたくさん散らばっている栗の毬を踏んで足の裏を傷つけるといけませんからという意である。

良寛の友をいたわる温かい心が流れている。

あづさゆみ春になりなば草の庵^{いほ}をとく出で来ませあひたきものを

貞心尼との唱和の中の一首である。貞心尼は良寛の高風を敬慕した
 唯一ただ人の異性の法弟で、晩年の良寛に不滅の生彩を添えたのは貞心尼
 とのめぐりあいであるといわれている。

年が明けたら、あなたの庵いおりを出て、一刻も早く訪ねて来て下さい。
 ああ会いたいものだなあの意。

「あづさゆみ」は春の枕詞。これを使うことによって韻律は澄徹す
 る。良寛は枕詞を愛好した歌人といわれ、枕詞を用いた歌が多い。

良寛の歌は生活の中で、楽しく仲よく生きようとする思いがあたた
 かく流れていて、作品からは慈しみにみちた良寛の到達点が偲ばれる。

短歌はその時その時の心の動きを、端的に訴えることを旨とし、人
 の心に直接ふれることができる文芸である。折を得て親しんでゆきた
 いと思う。

本稿は以下の文献から引用させていただいた。記して謝意を表した
 い。

参考文献

- ・窪田章一郎 『西行の研究』（東京堂）
- ・松本章男 『道元の和歌』（中公新書）
- ・吉野秀雄 『良寛』（筑摩叢書）

著者プロフィール



斎藤是心ぜしん（本名 / 正幸）

大正11年、熱海市生まれ。技術士（建設部門）、
 鉄道建造物の建設と保守に携わる。歌人。昭和28
 年、窪田空穂門下の大岡博氏に師事。『菩提樹』
 同人。歌集『秋の陽のなか』『六月の風』。昭和32
 年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布
 教師。庵号/慈雲庵。

人間禅の書(五)

長屋哲翁の書

藤井 紹滴

今回は「人間禅」の命名者である、擇木道場たくぼく（注1）主管者哲翁てつおう長屋喜一先生をとり上げます。哲翁の号は両忘庵しゃく釈宗活老師より授かった居士号である。如々庵にょにょあん芳賀洞然老師、磨甑庵まぜんあん白田劫石老師、雲龍庵かくざん松崎廓山老師という人間禅の師家方も、長屋先生との御縁で禅の修行に入られた。

私も昭和48年11月32歳の時に、二十代一杯かかって解けずにいた儒学上の疑問に苦慮し、解決を求めていた時、偶然擇木道場を訪ね長屋先生いんきんに初対面。その一打の引磬いんきん（注2）の響きとともに、一対一で始まった20分の静坐が、禅の修行の第一歩であった。薄ら寒い擇木道場での長い長い緊張の時間だったことを覚えている。

長屋先生は明治28年8月28日、岐阜県武儀郡板取村に生まれる。家は神官。大正5年、旧制第七高等学校造士館に入学。大正8年、東京帝国大学倫理学科へ入学。大正11年～14年、ドイツ留学。ベルリン大学、マールブルヒ大学に学ぶ。

先生の幼年よりの疑問は、「意志の自由は存在するか？」「自由というものは存在するか？」であった。留学中この解明に努力するが、「意志の自由」は存在するものの、新カント派でも実存主義でもその獲得法は示されなかった。それが禅にあることを知ったのは、帰国送別の夕食会の席上であった。

神学者ルドルフ・オットー教授いわ（1869～1919）曰く「日本へ帰って

何をするのか？」長屋先生曰く「禅の修行をする決意です。」「日本のどこへ帰るか？」
 「禅堂は方々にあります。」
 「^{おおはざま}大峽教授は、たしか何かを得た人だ。知らないなら紹介するから、大峽教授の所へ帰りたまえ。君の求めているものへ、何かを答えてくれるものを持っている。」と。大峽教授のドイツ語での著書『禅 日本における生ける仏教』を渡された。(この本の序文はオットー教授。長屋先生により70歳の時復刻。近年人間禅より再刻された。)



長屋先生（昭和59年、澤木道場にて）

シベリヤ鉄道で帰国し、小倉市戸畑在住の大峽教授（一夢庵竹堂老師）を訪ね、そのご紹介で釈宗活老師を訪ね、大正15年1月釈宗活老師に入門（31歳）。昭和2年の旧制静岡高校教授に始まり、東京帝国大学講師、日本大学講師、東京高等師範学校教授となる。昭和11年、両忘協会本部道場（市川市）の新築に伴い、一夢庵老師が擇木道場を購入、改造されたので、ここで修行を続けられた。昭和12年、文部省教学局教学官となる。昭和21年、一夢庵老師が帰寂された。同年公職追放となり、復帰までの間坐禅三昧に入る。昭和23年、擇木道場管理者を継承された。

昭和41年より、かつてドイツから受けた学恩に^{むく}酬いるために、毎年6月から11月までドイツを中心にドイツ語の通ずる各地へ、1週間ず

つ「^{せっしん}撮心」と称して坐禅行脚を単身で実践された。

昭和62年6月であったか、ある日私が擇木道場で独りで静坐をしていると、うしろの廊下を間違いなく長屋先生の歩かれる音を聞き、はてと思い廊下に出ると先生のお姿があった。「もう氣力がなくなったよ。」と一言。いくら何でも、92歳の先生には単身での^{じゆんしゃく}巡錫（注3）は無理であったが、難儀なことを頼まれても気にせず応じてこられたので、ホッとした一瞬でした。病気で1年空けた年はあったものの、毎年半年間21回にわたる行脚の実施という偉業を果たされたのだ。

ドイツでの撮心のことは、ここでは割愛する。

昭和4、50年代は、ドイツから擇木道場に坐りに来るドイツ人は常に何人がいたが、今は絶えてしまった。

長屋先生は、平成5年（1993）6月6日、擇木道場で帰寂された（96歳）。

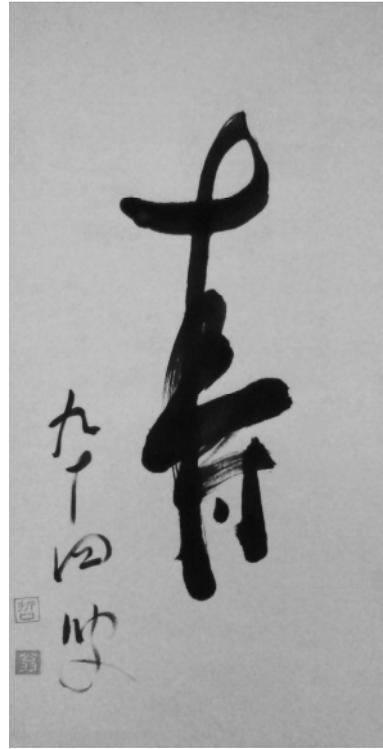
日頃口癖のように諭された語は「坐ってみなくちゃ、しゃーない。」と。「背筋を伸ばして、天地を尻にし、ドーンと坐る。経験第一で、坐ってみなくては何もわからぬ。口先だけでは何にもならぬ。『まず坐れ！』、『^{ただ}只坐れ！』である。」さらに「行住坐臥^が禅」、「立っていても、坐っていても、寝ていても、食事の時も、便所にいても、背筋が伸びていなければいけない。歩く時も、膝のうしろがしっかり伸びなくてははいけません。何事も徹しないとはいけません。」等々、忘れ難き語録である。

さて今回の2点の「寿」は、90歳と94歳の時、いずれも擇木道場で^{きごう}揮毫されたものである。いずれもその場に居合わせたので、昨日のこのように覚えている。

一つは、昭和60年11月5日、長屋先生より賜わった本の空白に、一瞬に筆を走らせられたものである。この書は、私が長屋先生の書を見



90歳の寿



94歳の寿

に筆を走らされたものである。この書は、私が長屋先生の書を見てきた中で、一番の傑作であろう。その本は、私の書架にもう25年も蔵されていて、誰も見ていないものだ。力強く、思い切りよく、無造作でありながら、不思議なバランスがある。しかし、無造作ほど難しいものはない。何か雑念が入るからだ。この辺の妙が禅と深いかかわりのあるところである。

筆順に従って細く心の動きを見てみると、まず軽く第1画の横画を引いて、筆端がととのった第2画は一気に下まで行き、下限で筆の毛先の乱れをそのままに、おし上げて、「寿」の字の中心部を軽く描いたあと思いきりよく左端にぶつけると、そこには、無造作のようできて、キチンとした蔵鋒そうほう(注4)ができ上がり、その力で思い切り右に、

この字の線の中で一番強く二本の線が右にのびる。

最後の寸の豎画の如き、それまでとは趣を変えた、ゆっくりと変化のある送筆となる。最後に軽く打った点も単純でなく結構複雑な動きをしていて面白い。ここの最後のところだけ見ていると、何か可愛らしい感じで面白い。考えていたのでは絶対書けない。心の中のものが飛び出してきたのだ。

長屋先生は日頃から筆を持って、半紙や画仙紙ではなく、何かの余り紙などに少数の句をよく書いておられた。特に草書には妙味が發揮されていた。先生に初めてお会いした日も、菓子箱をのぼされ、その裏に筆をすべらせていた。あまりに面白いので、その場で「これ、いただけませんか。」と厚かましさをかえりみず頂戴した。

もう一点は、帰寂2年前の94歳の「寿」である。これも擇木道場の堂内に入ってすぐ窓ぎわで、墨をすって用意して待っていると、先生は何を書くのか思案しておられたが、筆をとると「寿」を書体を変えて3枚書かれた。また、厚かましく頂戴した一点がこれである。「寿、九十四」と書かれて「『叟』(注5)の草書体はどうでしたか？」とたずねられたので、鉛筆で書いてお見せすると、即座に変化をつけて「叟」を書かれた。そしてかくの如く筆と心がみごとに相応じた「叟」が表れた。心のやりとりは実に見事である。「九十四叟」は、全く自由自在、何ものにもこだわっていない変化に富む書である。「哲翁」とは書かれなかったので印を押してこれにかえたが、印矩(注6)がなかったので「哲」を正確に押しそこねたのは、私の責任であり申し訳なく思っている。

本文の「寿」をこの2点で比べてみると、5歳の年齢の差は歴然としている。89歳の強さ細やかさは、94歳ではかなり衰えを見せ穏やかになるが、落款の「九十四叟」の変化の妙、するどさは、長年の修行

できたえた結果の書である。若い頃解決に苦心した「自由」へのまさ
に真^{しんしょう}正^{けんげ}の見解であり、人間禅の書の白眉^{はくび}であることがわかる。

先生は私に諭して「1時間書く時間があったら、その半分は坐って
から書いて下さい。何か違いますよ。」と。また「如何^{いか}にして文字を
超えるか 書はまさに手が書くものではない。およそ日本文化はずべ
て道(注7)の文化であるはずなのだが、今日墮落して大道に徹して
いない。茶道^{しか}然り。華道然り。書道もまた、その名称に反する。」と、
身をもって示されたのである。

編集部注

(注1) 擇木：木を擇^{えら}ぶこと。擇は、善悪を見分けてえらぶ意。『春秋左氏伝』
に【鳥は、すなわち木を擇ぶ。木、あによく鳥を擇ばんや。】とある。

(注2) 引磬：小さな鐘に柄をつけ、携帯しやすいようにしたもの。

(注3) 巡錫：錫^{しゃくじょう}杖をたずさえて巡行する意。僧が各地をめぐり歩いて教え
を広めること。

(注4) 箴鋒：書法で、起筆に筆の穂先を表さないように書くこと。

(注5) 叟：おきな。老翁。

(注6) 印矩：捺^{なついでん}印・落款のとき、印章の位置を定めるための定規。木製の小
さな曲^{かねじゃく}尺を用いる。

(注7) 道：宇宙根本の真理。大自然の生命のそのままの現れ。仏道。

著者プロフィール



藤井 紹滴 (本名 / 頼次)
しやうてき

昭和15年、東京生まれ。会社経営。金子清超先生
から儒学、書を学ぶ。無窮会にて儒学研究。研究
にゆきづまり、昭和46年以来、長屋喜一先生から
禅の指導を受ける。昭和61年、人間禅白田劫石老
師に入門。現在、人間禅輔教師。

俳句と些子記抄

第9号より

齋藤 徳治

近 詠

悠久や阿蘇従えて天高し

丸川春 潭

尉 鷄 先師の銘の石に啼く

誇るべき何一つ無き年惜しむ

冬天に触れてみませり阿蘇五岳

齋藤徳治

墨汁の一滴重し去年今年

西支那海一瞬見えし朝時雨

合掌俳壇（小評のみ） 齋藤徳治

啄木鳥や折々刻む天の時

清島俊峰

啄木鳥はアキ別荘の柱などに穴を開けて悪さをします。しかし枯れ立木に穴を開ける時の音は何とも心地よく響きます。作者はこの音が天が時を刻むが如く感じたのでありましょう。

流れ落ちて誰が懐へ夜這星

淵上磊山

夜這星 は流れ星の別名です。多分昔、夜這いの風習があった時分の星明りを季語としたのでありましょう。そう考えますと、一人の若者が夜這いに成功して目的を達したとも受取れます。大凡、季語の成立そのものが、平安貴族を中心とした山城盆地主体のもので約一千年前というのが定説です。しかしこの 夜這 などの因習は元々は東北地方の事でありますから、その点も考慮に入れるべきかも知れません。筆者は、日本各地特有の歳時記の必要性を感じます。

煩悩も来れ^{とうか}燈火に親しまん

井本光蓮

作者はもはや煩悩を自家薬籠の中に遊ぶ境地です。著者など遠く及ばぬ^{ところ} 処^{うた} です。人間枯れたようで枯れない心境を詠って余す処ありません。

(次の句から評を略させていただきます。: 編集部)

人の世の五分は運とも秋の風	加藤碩信
チェーンソーの獯 ^{どうも} 猛 ^{もう} なりし野 ^の 分 ^わ 跡	上田月庵
不自由も林 ^{りんご} 檣 ^ご よく剥 ^む く妣 ^{はは} なりし (注1)	金子 剛
残る虫ひりひり聴ゆ熱の床	君島裕子
団 ^{どんぐり} 栗の転生母の懐に	清島俊峰
手のひらにMEMOとる女医に冬ぬくし	井本光蓮
冬 ^{ばち} 蜂の死や一枚の葉に巻かれ	井本光蓮
吾が生活小春庭石座し温め	指出松月
冬霧の湯煙り混じる露天風呂	徳田昌則
時 ^{しぐれ} 雨忌の法楽句座や肩濡らす (注2)	井内温雄

私の印象句（第8号掲載句より）

齋藤徳治選

すがれ小町をべったら市に見かけしが	星野石雀
片恋の昔を惜む夜寒かな	井本光蓮
吾亦紅風の譜愛し恋えくぼ	坂部万千代
酔はせよか見せよか勢子の馬追ひを	淵上磊山
埒も無し加齢現象濁酒	清島俊峰
放たれし白き孔雀や三島の忌	余村光世
染めるもの染めたり秋の入日かな	久木田寶州
紐作り土鍋やうやく姿成す	片野慈啓
台風の進路に林檎畑在り	浜地和子
半眼の翁の視野に花芒	炭崎 博

井本光蓮選

たっぷりと干せる蒲団に死者を置く	余村光世
------------------	------

淵上磊山選

生き烏賊の足の動きも爛も佳し	丸川春潭
----------------	------

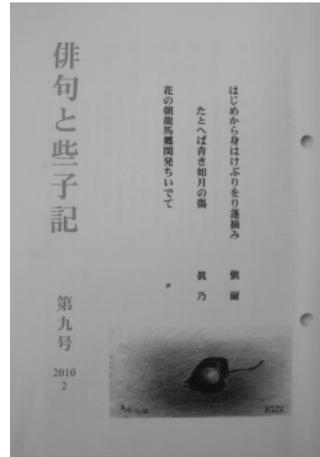
（本稿は、齋藤徳治先生が発行されている『俳句と些子記』第9号から転載（抄出）させていただきました。人間禅俳句部は、齋藤先生にご指導をいただいております。同誌掲載の「合掌俳壇」はその作品集であります。文責：編集部）

編集部注

（注1）妣：亡き母。

（注2）時雨忌：芭蕉忌。齋藤先生の御尊父齋藤兼輔先生は、松尾芭蕉の墓のある

義仲寺（大津市）のご住職で、俳人でもあられた。兼輔先生も、人間禅俳句部の育成に力を尽くされた。



投句先

- 『俳句と些子記』 / 〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町276
ル・グラン元町706号
齋藤徳治 (TEL・FAX 045-681-6623)
- 『合掌俳壇』 / 〒270-0316 千葉県流山市古間木292-4
林 玄妙 (TEL0471-50-0171)

著者プロフィール



さいとう
齋藤徳治

昭和13年、神奈川県横浜生まれ。昭和40年より「合掌俳壇」選者担当。平成22年6月、人間禅三松涼陰老師に入門。現在、俳誌『俳句と些子記』主幹。句歴約50年。